

# 京都「東九条マダン」の中心的担い手についての考察

——在日の文化運動団体「ハンマダン」に焦点をあて——

片岡千代子

1. はじめに
2. 背景
  - 2－1. 東九条地域概要
  - 2－2. 「東九条マダン」概要
3. 担い手集団
  - 3－1. 担い手集団の概要
  - 3－2. 担い手
    - 3－2－1. 現在
    - 3－2－2. 通時的分析
4. 「民族民衆文化牌 ハンマダン」
  - 4－1. 「ハンマダン」概要
  - 4－2. メンバーのエスニック・アイデンティティおよび拠点としての「地域」
  - 4－3. 「東九条マダン」とのあいだで
  - 4－4. 「東九条マダン」への参加
5. 2つのマダン
6. おわりに

キーワード：在日、祭り、文化運動、担い手  
集団

## 1. はじめに

現在、日本各地で「まつり」<sup>(1)</sup>が花盛りである。近年は必ずしも伝統性・宗教性に基かない新しい祭りが目立つようになってきているが、その1類型として、エスニック・マイノリティ<sup>(2)</sup>による祭りがあげられる。

このうち、在日コリアン<sup>(3)</sup>を主体とした祭り（以下、在日の祭り）は1980年代に登場した。

（謝辞）

本論作成にあたり、大阪経済法科大学アジア研究所の月例会（2005年10月14日）では華立氏、玄善允氏をはじめ諸先生方から貴重なご意見、ご指摘を頂戴いたしました。また調査にあたり、「東九条マダン」の現実行委員長をはじめ参加者の方々には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

（1）本論では「まつり」を「何らかの象徴を用いることによる日常的世界の反転、それからの脱却と変身によって、日常的な現実を客体化、対象化し、それによって感性の世界を復活させ、社会的な共感を生み出す、周期性、公開性を特徴とする、集団的な行為」という意味合いで用いる（松平誠『都市祝祭の社会学』、有斐閣、1990年、2ページ、をもとに筆者が再定義）。したがって、民族団体や学校といった特定の集団内で行なわれる公開を前提にしない行事は含まないことにする。また同一の現象であっても「イベント」は集客の側面、「祭り」は主として当事者側の社会的時間の分節化に比重を置いた概念として、筆者は捉えている。なお「東九条マダン」の当事者組織では、「祭り」「祭」の漢字表記は神社の祭礼を想起させるとの理由

で忌避され、平仮名表記「まつり」が好まれているが、本論では便宜上「祭り」と表記する。

（2）本論では「エスニック・マイノリティ」を、明治以降の「国民」の成立過程で、「日本人」の成立に必要な「他者」として利用された日本国内の朝鮮系、中国系、琉球系、アイヌ系などのオールドカマー、および新たに「日本人」／「非日本人」の境界維持のメカニズムに組み込まれていっているニューカマーの定住外国人を指す言葉として用いる（金明美、「日本におけるエスニシティ論の再検討ーバウンダリー論を中心として」65号、2000年、85～86ページ）。また「エスニック・アイデンティティ」とは、そのような歴史的・社会的・文化的背景に基づいた自己意識のこととする。

（3）本論では「在日コリアン」を、「朝鮮半島に何らかの形で出自があるという自己意識をもつ人々」という意味合いで用いる。つまり朝鮮籍・韓国籍者だけではなく、かつて朝鮮籍・韓国籍であり後に日本国籍を取得した者や、朝鮮籍・韓国籍者と日本国籍者の間に生まれた子供やその子孫までも含めることにする。2004年末の外国人登録者数は197万人を超え、国籍数は183カ国を数える。そのうち韓国・朝鮮籍者は約60万名、

その背景には、高度経済成長期における経済生活の向上と、これに伴う生活文化面での日本人との同質化の進行という現実があった<sup>(4)</sup>。民族の特性が消滅するのではないかという危機意識が高まる中、在日は祭りという文化運動に活路を見出そうとしたのである。こうして1983年、日本最大の在日集住地域の大阪市生野区で「生野民族文化祭」が発足、その動きに触発されたかのように、1990年代以降は西日本の在日集住地域を中心に同種の行事が続々と産声をあげ、その数は20近くにも及んだ<sup>(5)</sup>。

ところで近年、在日を巡る状況は急激に変化している。通婚者や日本国籍取得者、ニューカマーが増加し、何より世代交替が進んでいる。ホスト社会・日本の事情も変わった。相変わらず差別意識は残りながらも、「多文化共生」「人権文化」といった言説が一般化した。在日の祭りも、この流れに無縁ではあり得なかった。なるほどその多くは従来と変わりなく、人権擁護やマイノリティ文化の可視化・継承、エスニック・アイデンティティ確認等を旨とする社会運動との連携を継続してはいる。だがその一方で、「多文化共生」といった支配的言説を祭りの戦略として用いたり、まちづくりや地域イベント

としての性格を強調したりするようになった。つまり、対抗文化的性質を保持しながらも、在日以外にも開かれた側面を前面に押し出すようになってきたのである。

一般に「民族祭り」と称される在日の祭りについては、これまで社会学や人類学の見地から、例えば、祭りにみる「民族」の象徴機能<sup>(6)</sup>、エスニック・アイデンティティの高揚機能<sup>(7)</sup>等が明らかにされてきた。ただ主たる事例は「生野民族文化祭」であり、1990年代以降に始まり現存する祭りは議論の俎上にのせられてきたとは言いがたい。

そこで本論では、京都市最大の在日集住地域で行われる「東九条マダン」(2005年で第13回)を事例に選んだ<sup>(8)</sup>。「東九条マダン」の企画運営を担う集団(以下、担い手集団あるいは祭り集団と記すこともある)の運営形態や集団構成の分析により、担い手集団の中でも役割分担上最も参加密度の濃い団体を析出し、その団体、すなわち在日の文化運動団体「ハンマダン」(以下、「ハンマダン」と記すこともある)の特性や祭り集団への参加の考察を通して、祭り集団の特性を逆照射していく。

「東九条マダン」は1993年に第1回が開催さ

るまでである。2000年以降、「生野民族文化祭」や神戸市長田区の「長田マダン」といった当事者組織が在日同胞に限定したものを含む、幾つかの祭りが閉幕した。その一方で在日が中心的に参加しつつ、「アジア」や「多文化共生」をテーマにした祭りが新しく誕生している(藤井幸之助、「マダン交流会覚え書き」2005年3月12日まちづくりマダン交流会配布資料)。

(6)飯田剛史、前掲書、322～326ページ。

(7)江口信清、「民族の祭り」とエスニック・アイデンティティの高揚—朝鮮・韓国人による生野民族文化祭の事例—井上忠司編『文化の地平線』所収、世界思想社、1994年、258～262ページ。

(8)考察の対象となるデータの中心は、1999年10月から2005年現在までに行った祭り当日や会議、準備作業等の参与観察、および主に2003年3月から10月に参加者30人に対し実施した個人的なインタビューにより得られたものである。なお語りの引用箇所の仮名の前に記した在日/日本人は、国籍ではなく、各人のエスニック・アイデンティティを表す。

全登録外国人の約30.8%であり、永住資格者すなわち戦前在日者とその子孫は約46万名である(<http://www.moj.go.jp/main.html> 法務省 2006年1月15日)。また元韓国・朝鮮籍からの帰化者は1952年から2003年のあいだで約27万人に及び、1990年代後半以降は毎年1万人前後が日本国籍を取得している([http://www.mindan.org/min/min\\_reki.php](http://www.mindan.org/min/min_reki.php) 在日本大韓民国民団中央本部 2006年1月15日)。日本籍を取得した「日本籍朝鮮人」や、在日と多数派日本人とのあいだに生まれた「ダブル」を含めた、包括的な在日の数は150万人と推定される(戴エイカ、『「在日」にとって「民族とは何か?」』『大阪市立大学人権問題研究センター編 人権問題研究』2号、2002年、7ページ)。

(4)飯田剛史『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』、世界思想社、2002年、319～320ページ。

(5)それらは基本的には個別に実施されており、発足の背景や趣旨、実施内容はそれぞれ異なる。地域の学校を会場に数千人規模で実施される祭りから、著名人をゲストに迎え入場料を徴収し数万人規模を集客するも

れた。テーマに「民族」のみならず「地域」「共生」を掲げ、発足当初から日本人<sup>(9)</sup>との共働で実施されてきた。祭り当日の演目をみれば、近年はとりわけ「多文化共生」の様相を呈し、準備段階は多種多様な人々にいつでも開かれている。いわば「東九条マダン」とは、在日の文化運動を基盤としつつも、常に在日以外を編入することで継続してきた新しい祭りである。そこにおいて、マジョリティ、すなわち日本人や日本文化に対し在日の対抗的性格はいかなる位相で保たれ、いかなる内実をもっているのか。また、それは祭り全体の中でいかなる機能をもつのか。これらの問いについて、祭り集団論の観点から考察するのが本論の主たる目的である。

## 2. 背景

### 2-1. 東九条地域概要

「東九条マダン」の舞台、東九条はJR京都駅南に広がる南北約1.5km、東西約1.3kmの一帯で、行政管轄上は京都市南区の山王・陶化・東和の3小学区41ヶ町である。駅前には商業施設、地域中心部の旧街道沿いには旧家、南には工場が点在する等、地域でも場所によって雰囲気が大きく異なる。人口は約1万7千人7千世帯(2000年現在)、うち外国籍住民の割合は16.3%(南区全体では6.8%、京都市全体では2.5%)、南区の外国籍住民のうち韓国・朝鮮籍住民が占める割合は96.9%(京都市全体では3.7%)であることから、東九条の外国籍住民のほとんどが韓国・朝鮮籍住民と推測される。ただ日本国

籍取得者や韓国籍・朝鮮籍者と日本籍者との間に生まれ日本籍となった子供等、統計には表れることのない在日も多く居住していると思われる。また北側には市内最大の同和地区が隣接する。

東九条は、もともと東九条村といい閑静な田園地帯であったが、1877年の京都停留場の開業、1918年の京都市編入、1935年から1938年にかけて行われた東九条周辺の幹線道路の新設・整備を含む都市計画事業や区画整理事業や、それらに伴う工場等の増加により、染色下請けを中心とする小規模零細工場のまちへと変貌した。地域内の朝鮮人労働者数は1910年の韓国併合以降漸増し、1925年前後を境に急増する<sup>(10)</sup>。朝鮮人労働者は劣悪な賃金、過酷な労働条件のもとにあり、彼らの集住する一帯は、10年後にはスラム化の様相を呈していた。戦後は、京都駅南部側にできた「ヤミ市」、米・食料品の買出し、朝鮮戦争特需景気等を背景に朝鮮人・日本人に拘らず新たな住民が流入、バラック住宅が増加、1964年の東海道新幹線開通に伴う立ち退きの強制で多くはそのまま地域内南部への移動を余儀なくされ、中には河川敷に住むようになった者もある。その後も、行政による幾度かにわたるクリアランス作業に拘らずバラック住宅は増加、火事が多発し、京都市は1968年に「京都市スラム対策基本計画」、1972年に実態調査と再開発計画をふまえて「パイロットプラン」を策定した。しかし現実には十分に整備が行われたとはいえず、1976年以降、大学関係者や地元住民らによって対行政交渉が開始された。1988年に

(9) 本論では「日本人」を、「日本人＝日本国民＝日本民族＝日本語(国語)＝日本文化」というイデオロギーを意識的・無意識的に共有し、自らをその構成員であると考えている人々をさすものとし、行論上、日本国籍をもつ在日は「日本人」に含めないことにする(島村恭則「朝鮮半島系住民集住地域の都市民俗誌―福岡市博多区・東区の事例から」『国立歴史民俗博物館研究報告』124号、2005年、247ページ)。

(10) 具体的には、1920年に発足した京都協助会(融和団体)が、1925年に東九条岩本町(現在の京都駅南東、旧東九条村よりむしろ隣接する同和地区の生活圏に含まれる一帯)に協助会館を建設したことが、東九条に多くの朝鮮人が住むようになった最大かつ直接の契機と想定される(宇野豊「京都東九条における朝鮮人の集住過程(1)―戦前を中心に」『世界人権問題研究センター研究紀要』6号、2001年、55～58ページ)。

バブル景気下の地上げ問題多発等に絡み「東九条地区改善・長期計画（素案）」が公表され、1990年代以降によく実質的な住環境整備が始まった。近年は高齢少子化が進むとともにニューカマーの流入が顕著になりつつある。また長年住環境改善運動を主導してきた団体のNPO法人化、在日高齢者のみを対象とした福祉施設の開設等の動きがある。

東九条では、1960年代から住民運動が地道に展開され、特に1980年代以降は、日常生活に根ざした幾つかの文化的な取り組みがみられるようになった。識字学校<sup>(11)</sup>、保育園<sup>(12)</sup>等キリスト教を背景にもつ地域福祉活動、在日の民族文化サークル<sup>(13)</sup>、ニューカマーを対象にした日本語教室<sup>(14)</sup>、鴨川河川敷の在日多住地帯<sup>(15)</sup>での夏祭り等である。1986年には、後に祭り発足の主力となる在日の文化運動団体「ハンマダン」が結

成された。これらは基本的に個別に展開し、各運営組織が1つの場に糾合しようとする大きな動きはみられなかったが、様々な場面で互いに連携を模索していた。1980年代は、いわば祭りの胎動期であり、こうした状況を背景に、1993年秋「東九条マダン」という祭りが産声をあげることになる<sup>(16)</sup>。

## 2-2. 「東九条マダン」概要

「東九条マダン」の開催には11月の第1週の休日が充てられる場合が多い。会場は東九条地域の公立学校（3小学校、1中学校）を毎年巡回している。一般に開放されており、入場料は無料である。まず恒例演目<sup>(17)</sup>を中心に当日の様子をみておく。会場となる校庭は、「いこかつくろか東九条マダン」とかかれた横断幕、朝鮮の文化を想起させる絵や立体物、子供達が描い

(11)「九条オモニハッキョ」。1987年、東九条にある京都南部基督教会に開校した在日1世を対象にした識字教室である。学習のほかに在日1世と在日2世3世や日本人との交流が充実していたが、2002年生徒の減少等を理由に閉校した。その後、一部の有志によって、「オモニハッキョ ケナリ」が開校し、細やかではあるが活動を継続している。

(12)「社会福祉法人カトリック京都司教区カリタス会地域福祉センター 希望の家カトリック保育園」。1966年に学童保育所が開設されたのをうけ、1967年に設立された。保育園がある山王学区は地域でも在日の集住率が高く、早期から民族文化を取り入れた活発な教育を実践してきた。

(13)その1つ「サークル在日」は、朝鮮文化の学習会であり、子供を対象にした民族楽器の教室も開講していた。ほかに在日同胞の親達が悩みを語り、親同志・子供同志の仲間作りを目的にした「アボジ・オモニの会」という活動もあった（朴実「子供達に願うこと」金容権・李宗良編『在日韓朝鮮人一若者からみた意見と思いと考え』三一書房、1985年、234ページ）。

(14)主に地域の日本人女性達が、婚姻を契機に渡日した韓国女性を対象に、日本語教室を提供していた。祭りには第1回、それ以降もしばしば出店で参加、現在も細々であるが継続する。

(15)かつて「0番地」（または「40番地」）と呼ばれていたバラックの集合地帯で、住民の約8割が在日である。1989年からの行政闘争の結果、1999年に集合住宅の第1棟が完成した。

(16)「東九条マダン」が発足した1993年は、在日の文化運動の活性化と日本のお祭ブームとが交差する時期といえる。1980年代後半から1990年代前半にかけて、小さな祭りが次々と登場した。その背景には、1987年「多極分散型国土の開発」を掲げた四全総（第4次全国総合開発計画）の策定、1988年竹下登内閣の「ふるさと創生」政策、1992年「おもつり法」（地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律）の策定等がある。（阿南透「伝統的祭りの変貌と新たな祭りの創造」小松和彦編『祭りイベント』所収、小学館、1997、68～71ページ）。また急速に押し寄せるグローバリゼーションや文化の画一化・均質化という大きな流れを受け、地域が対抗文化の形成の拠点として着目され始めた（井上俊「民俗と風俗」井上俊編、前掲書、21～23ページ）。在日の祭りについても現在実施されている大半が、1990年代前半に始まった（藤井幸之助、前掲資料）。

(17)在日の祭りのほぼ全般に、農楽や舞、マダン劇といった在日社会で一般に「民族文化」として把握されている表現を用いた演目がみられる。これらは現代の韓国で「民族伝統文化」として再定義された文化的要素であり、1960年代以降の急速な近代化と都市化の波が押し寄せるなかで起こった、民衆や学生による「民俗文化」復興運動や民主化を求める政治的抗議行動で用いられた。つまり単なる世代継承ではなく、運動のリーダー達によってエスニック・シンボルとして改めて選択・編集されたものである（飯田剛史、前掲書、312～313ページ）。

た垂れ幕等で装飾され、会場中央には「マダンパン」と呼ばれる円形のメインステージがゴザを敷いて作られる。朝、白色をベースにした民族衣装を身につけた総勢100人ほどのブンムル隊<sup>(18)</sup>が鉦や太鼓を打ち鳴らしながら会場周辺の街路を賑やかにパレード、会場に到着すると祭りが開会する。開会の挨拶の後は、保育園児達による「くす玉割り」、「大ブンムル」、一般参加企画<sup>(19)</sup>の「ノレチャラン（のど自慢）」、「マダン劇」<sup>(20)</sup>、一般参加企画の「シルム（相撲）決勝」、目玉の出し物「和太鼓&サムルノリ」<sup>(21)</sup>等が続き、「ティップリ（フィナーレ）」では客席のゴザは全て取り払われ出演者やスタッフ、来場者が、地域の女性の歌う朝鮮民謡や民族楽器に合わせて一体となって歌い踊る。ちなみに

第13回（2005年）はそれらに加え、地域の中学校吹奏楽部、市内同和地区のダンスサークル、民族学校生徒による太鼓や舞、大阪の沖縄出身者達によるエイサー、在日ラップグループ等が出演した。そして会場周辺には雑貨や書籍、朝鮮料理を販売する出店の他、民族衣装の試着や民族楽器、仮面作りや朝鮮紙細工等の各種体験コーナーが設置された。

「東九条マダン」は1993年、在日2世B氏<sup>(22)</sup>の呼びかけに、B氏自身が率いる「ハンマダン」やT団体、N団体といった在日青年による民族団体<sup>(23)</sup>、1980年代から地域で活動する前述の諸団体等が連動する形で発足した。祭り発足にあたって、団体単位での参加の呼びかけ<sup>(24)</sup>もされたが、実際は「口コミ中心」で人が集まり、第

(18)「ブンムル隊」とは、朝鮮半島の代表的な民俗芸能である農楽を基にした楽器隊のことである。当事者組織では「農楽」の表記で「ブンムル」（「風物」のハンゲル読み）と呼ぶことが多い。農楽とは、村落共同体の集団意識の高揚、維持、育成に活用されてきた、楽・舞踊・演劇を含んだ総合芸術であり、中でも音楽の比重が大きい。楽器の種類は、クエンガリ（鉦）、チン（銅鑼）、チャンゴ（筒型の腰のくびれた太鼓）、ブク（円形の平たい太鼓）、ソゴ（でんでん太鼓）、ナルラリ（チャルメラ）等である。「東九条マダン」の「ブンムル」ではチャンゴ、ブク、ソゴといった太鼓が全般的に用いられる。また「ブンムル」と「サムルノリ」は演奏形態が異なる。「ブンムル」は農作業を合間に楽器を打ち鳴らしながら集団で歩き回った民俗の風習に基いたもの、「サムルノリ」はサムル（4つの楽器）、すなわちクエンガリ、チン、チャンゴ、ブクを用いて座ったままで演奏するものである。一般に「サムルノリ」の方が、難易度が高く演奏に一定の技術が必要とされる。

(19)「一般参加企画」とは、当日来場者の飛び入り参加を企図した演目である。例えば「東九条ウルトラクイズ」、「つなひき」、朝鮮半島の子供の遊びをアレンジしたものがある。

(20)「マダン劇」とは、会場に作られた平面状の円形舞台で演じられる劇のことである。もともとマダン劇とは、新植民地主義の支配下に入った現代の韓国で民衆の表現手段として生まれた抵抗劇の一種で、屋内に設置された箱形舞台ではなく野外に作られた舞台、マダン（広場）で演じる点を最大の特徴とする。1970年代初頭の韓国で、伝統民俗文化復興運動で用いられた祝祭性と風刺性を特徴とする仮面劇（仮面を用いた伝統

演劇）が大学生を中心に広まった。その表現形態に民衆運動家や農民、労働者が関与する中で、社会の現実問題を風刺するマダン劇へと発展してきたのである。特に、軍事政権下での民主化運動において重要な役割を果たした（梁民基・久保寛『仮面劇とマダン劇—韓国の民衆演劇』晶文社、1981年、21～26ページ）。このような動きが1980年代初頭に在日社会に伝わり、以後マダン劇は「在日の表現」の1つとして文化運動においてしばしば用いられてきた。

(21)第4回から始まった、朝鮮の太鼓と和太鼓のセッションである。「在日と日本人が作る祭り」、あるいは「在日」を象徴するパフォーマンスとして、祭りを代表する演目である。

(22)現「東九条マダン」実行委員長でもあるB氏は、「日本籍朝鮮人」を名乗る。氏は1987年、帰化時に強制された「日本の氏名」から民族名を取り戻し、1994年には、帰化時に強制的に採取された「10指指紋返還訴訟」に勝訴した。

(23)「T団体」とは、1960年に発足した在日青年の民族団体で、祖国統一、民族意識の高揚と権益擁護等を主旨に掲げる。東九条に京都本部の事務所を構える。政治的な運動のほか、語学、歴史、音楽等の勉強会を行う。「N団体」とは、1991年に発足した在日の青年団体で、日本社会で生活するという現状に根ざした運動理念を掲げていた。京都支部は1993年に解散した。

(24)各団体への参加の呼びかけにあたり、「準備会に呼びかける団体」「実行委員会に呼びかける団体」「協力と呼びかける団体」というように、地理的要因はいうまでもなく、各々の団体の活動理念や状況などが熟考されたのは言うまでもない。特に民団・総連の2大民族団体の位置付けについては、1993年当時は緊迫した

図1 「東九条マダン趣旨」

東九条마단 취지	
1. 한국・조선인, 일본인이 같이 주체적으로 참가하며 제각기 참다운 자기 태도와 상호 교류를 꾀하는 마단을 만들시다.	
2. 매일 두포 모두가 함께 참가할 수 있는 대중놀이가 되도록 할 것과, 이를 통하여 자라나는 아이들의 산 민족교육의 마단을 쌓아 나갈시다.	
3. 온 겨레의 영원인 민족통일을 앞당기기 위하여 자기 살고 있는 지역에서부터 남·북 화해와 통일에 이바지하는 마단을 꾸밀시다.	
4. 서로 일장이 다른 사람들이 함께 마음을 나누며 노래하고 춤을 추는 즐겁고 활기 있는 마단으로 해 나갈시다	
東九条마단 실행위원회	
東九条マダン趣旨	
1. 韓国・朝鮮人、日本人が、共に主体的に祭りに参加し、そのことを通じて、それぞれの自己解放と真の交流の場を作っていきたいと思ひます。	
2. 在日韓国・朝鮮人全てが、ひとつの祭りの輪に参加できるように、世代交流の場とし、そのことを通じて、3世・4世の子供たちの生きた民族教育の場を作り出したいと思ひます。	
3. 朝鮮民族の願ひである民族統一に寄与するために、生活の場である地域から、南・北和解と統一につながるマダンを作っていきたいと思ひます。	
4. 東九条で生活する様々な立場の人々が、共に生き、人と人が真に融れ合える、そのようなマダンにしたいと思ひます。	
東九条マダン実行委員会	

※出典「第12回東九条マダン」当日パンフレット

1回実行委員会の結成時には地域内外の日本人の姿も複数みられた。草創期から日本人との共働による祭り作りが模索されてきたわけである。それは担い手集団が祭りのテーマとして掲げる4項目形式の「東九条マダン趣旨文」(図1)にも表明されている。この趣旨文は4項目のうち3つが「民族」、1つが「地域」を主題にする<sup>(25)</sup>。それぞれの項目は〈民族関係論〉、〈民族文化継承論〉、〈民族内関係論〉、〈弱者・被差別者連帯論〉としてまとめることができよう<sup>(26)</sup>。

世界情勢を背景に、現在にも増して、慎重な議論がなされた。なお2大民族団体やその下部団体の関係者の一部も、準備会には数回参加した。

(25)ただ第1回準備段階では「地域」はあくまでも潜在的文言で、表立っては「民族」と「共生」が2大中心軸として掲げられていた。例えば、祭り開催の動きを掲載した当時の新聞記事のタイトルには「民族触れ合いの場」計画、東九条の住民、日・韓・朝9月に文化祭『読売新聞』1993年1月24)、「民族文化を継承し「共生」を実現しよう」『統一日報』1993年1月27)、本文には「東九条マダンは「民族交流のマダン」と「共生のマダン」が2つの中心軸」との一節がみられる。近年は「地域」が公式テーマの1つとして定着し、

ここでごく簡略に祭りの歴史的経緯を述べる。

第1回(1993年)から第3回(1995年)は在日の運動団体関係者の全面的な参加がみられる等、在日の啓蒙的意味合いを強く帯びた時期、第4回(1996年)は人の移動が目立ち当事者組織の一部が再編された時期、第5回(1977年)から第7回(1999年)は事務局長に日本人が就任する等、「地域」の祭りとしての充実化が図られた時期、第8回(2000年)から第10回(2002年)は「多文化共生」の祭りとしての意識化が進み参加者や演目の多様化が進んだ時期、第11回(2003年)以降は充実化のなかで再び「地域」に焦点が合わされる等、新たな模索が開始された時期としてまとめることができる。

### 3. 担い手集団

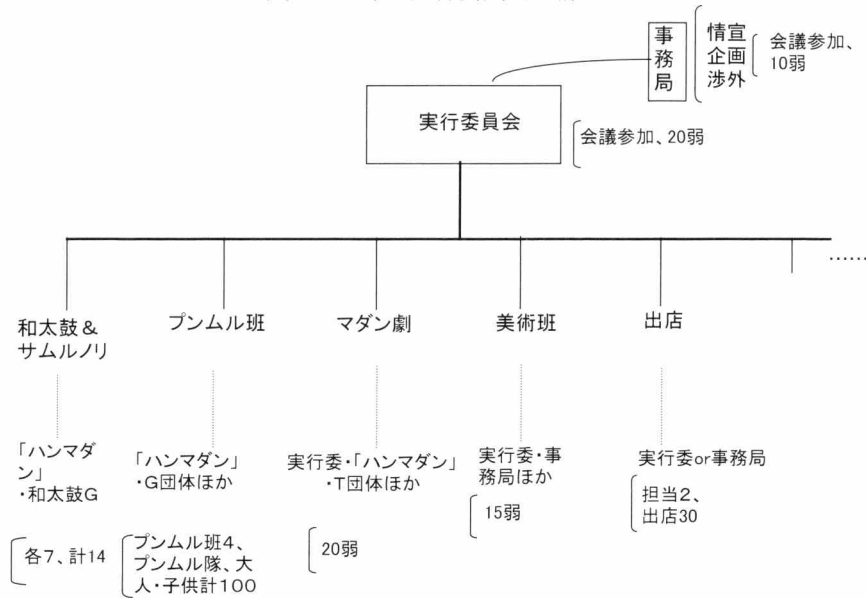
#### 3-1. 担い手集団の概要

担い手集団の活動は多様であり、祭り当日開催に向けて幾つかの活動が同時並行的に展開される。集団構成は事務局と実行委員会の2組織体制(図2)で、実行委員会は事務局の参加者のほか、祭りの演目に直接関わる練習や作業を行う幾つかの班によって構成される。これら各セクションへの参加者は重複している場合も多い。参加者は事務局の正式報告によると在日4、日本人6である<sup>(27)</sup>。男女比率は半々、年齢は10代から60代まで幅広く、居住地は地域の者が約

当事者組織では「地域の祭り」や「東九条の文化」という自己表象も頻繁になされている。しかし「地域」が公式テーマに掲げられたのは、第1回が成功に終わり、祭り当日の会場として地域の公立学校のグラウンドが毎年順繰りに提供されることが決定してからであると解釈できる。東九条の住民の大半は日本人であり、当初、在日が主体の祭りの表象に「地域」を用いることは慎重を期されたようだ。実際、第1回は「東九条マダン」が公認団体でないことを理由に会場決定が難航を極めた。

(26)小川伸彦「民族まつりへのアプローチ—京都・東九条マダン研究序説」『奈良女子大社会学論集』10号、2003年、72ページ。

図2 近年の実行委員会の構成



※フィールドノートに基づき筆者作成。

※班名の下は、主たる担い手、および凡そのメンバー数。

※各班それぞれ担当者を1、2名おいている。

実際に関与するメンバー数については、規定、規約がないこともあり、確定できない。したがって、筆者が調査するなかでの平均値を示した。

※「ハンマダン」＝在日の文化運動団体「ハンマダン」。

「T団体」＝東九条に事務所を構える、在日青年の民族団体。

「G団体」＝主に市内の大学に通う在日学生による民族団体。

3割、東九条ではないが近隣地域の者も多く、京都市内在住者がほとんどである。当日スタッフとしては教職関係者や学生が若干多いが、全体的には職業も多様である。事務局の会議に10名弱、実行委員会の会議に20名強、当日スタッフとして160名前後が平均して参加する。参加者間で承認を得た正式なポストは実行委員長のみである。また担い手集団は、原則として「個人参加」を掲げるが、これは建前上であって、

実質的には「団体参加」と「個人参加」の2通りの参加形態がある<sup>(27)</sup>。しかしこれは特に事務レベルでの認識枠組みであって、実際の参加のあり方に則してみれば、この2つの参加形態は明瞭に区分されるものではない。現実、個人のアイデンティティは重層的であり、例えば、立場上は「団体」であっても、団体の枠内に必ずしも留まらない参加がみられる場合もしばしばある<sup>(28)</sup>。なお担い手集団や祭り当日の運営はボ

ㄨ (27)『朝日新聞』2003年10月31日。

(28)「団体参加」とは各団体の方針に則って、あくまでも各団体の構成員の立場で参加する場合、「個人参加」とは個人的な意思や動機、ネットワークにより祭りにアクセスし参加する場合である。ちなみに在日の祭りの多くは、団体・組織や教職関係者等の団体動員を前提にしている傾向がある。例えば2005年4月実施された「まちづくり交流マダン」(主催「芦屋マダン」実

行委員会)ではシンポ開催にあたり、予め祭りの紹介を目的にしたアンケートが各地の祭りの事務局宛に配布されたが、その参加者内訳記入欄は団体・組織単位で書き込めるように作成されていた。

(29)ただ本論では、参加者個人の祭りへの参加が個人のネットワークや意思によるものであったとしても、その当人の所属する団体が祭り組織に参加している場合は、分類上、「団体参加」に含めた。



ランティアおよびカンパで成り立つ<sup>(30)</sup>。

祭り当日までの担い手集団の活動をみていく(表1)。担い手集団の活動は多岐にわたるが、そこには2つの質的傾向が認められる。事務や企画に関する話し合いの領域と、楽器演奏や劇等の演目、あるいは会場装飾といった祭り当日のパフォーマンスに直接関わる領域とである。本論では仮に、前者を会議の領域、後者をパフォーマンスの領域と呼ぶことにする。具体的には、事務局は通年機能し、主に当日の企画運営や宣伝方法の策定、対外交渉といった基本的方針の決定、報告集の作成等、祭りに関する各種事務を行う。会議は通例、JR 京都駅にほど近い木造平屋の祭り事務所毎月1回平日の夜に2、3時間かけて行われる。正式な会議の他、個人的に集まって話し合いや作業が行われることも多く、当日間近やその他必要が生じればそのつど召集がかけられる。一方、実行委員会は通例7月初旬に結成し12月に一旦解散する。会議は月1回週末の夜、参加団体の1つ「ハンマダン」の活動場所を借りて開催され、主に演目内容をはじめ当日の運営に関する決議決定を行う。また実行委員会は新規の出店や出演申し込みがあった際の、直接的で正式な顔合わせの場として位置づけられており、祭りに賛同・協力する意思が「実行委員会に実際に足を運んだか否か」で図られる傾向がある。そして「プンムル班」「マダン劇班」「美術班」といった祭り開催に直接関わる班単位の活動がある。これらは実行委員会結成と同時に活動を開始、基本的にはそれぞれの担当者の下で独自に進められ、主に会議の際、適宜活動報告や情報交換がなされる。当日スタッフは、事務局・実行委員会の参加者の他、過去の参加者や友人・知人等と呼び

かけられ、当日間近にそのつど結成される。

担い手集団は、基本的には「いつでも誰でも参加可能」であり「来るもの拒まず、去るもの追わず」の体制である。担い手集団への参加にあたり<sup>(31)</sup>、エスニック・アイデンティティや国籍、年齢、居住地、職業等の個人の属性は一切問われない。参加の濃淡も個人の裁量に委ねられている。実際、参加資格の審査やイニシエーションに相当するものはなく、メンバー登録による拘束もない。カンパ協力者の名簿はあるが、会議や作業への参加者を含めた担い手集団全体を把握できる正式な名簿は存在しない。間口は広いが出るのも自由である。したがって、知らぬ間にいなくなる者も多いが、一度いなくなっても気が付けば再び姿をみせている者も多い。

そこには、ある理念や規則の共有を前提とした「メンバーシップ」よりも、単に「つながり」といった極めて緩やかな関係性がみられる。「名前は知らなくても顔は知っている」といった間柄が通例である。事務連絡を目的に電話番号やメールアドレスが交換される場合があっても、多くは住所等プライベートに関する情報は互いに知らない。2、3回と参加するうちに顔馴染みもできて自己紹介や挨拶を交わすようになり、そのうち頻繁に顔を合わせる中で仲間意識が芽生え、一定の作業をこなしたり必要に応じて事務所の鍵を渡されたりすることで、何となくに祭りの作り手としての意識が自他ともに生じてくる。全体としてみれば、「何らかのかたち」で部分的に参加している参加者がほとんどである。その年の実行委員会が解散し祭りに関する実質的な作業がなくなると参加者のほとんどは雲散離消する。

このような担い手集団においては、参加者各々

(30)ただ第10回(2000年)以降は、祭り当日開催に必要な経費の一部について、「京都市人権啓発活動補助金」の助成を受けている。

(31)担い手集団への参加を呼びかける主な媒体は、当日

ビラや地域に全戸配布する「マダンニュース」というフリーペーパーである。近年はHPやマスメディアによる問い合わせも頻繁である。



表1 祭り当日開催までの流れ (第12回、2004年度)

[illegible]

※※ファイールドノートに基づき筆者作成。

※※※「プンムル班」が「プンムル隊」の前身である民族楽器教室を主宰している。

※1) マダンN-マダンニュース。まつりの広報をかねて発行するフリーペーパー。近年は、東九条地域に全戸配布をする。

※2)「東九条マダン」の「ブンムル隊」として出演するイベント。船岡山一船岡山フェスタ、京都市北区の同和地区主催の人権関連イベント。S地区文化祭一隣接する同和地区の文化祭。

※「和太鼓&サムルノリ」は練習開始前に、意見交換する場を設けている。

※美術班は、近年、実行委員会が存在しない時期も月に1回ほど集まり活動（次年度に向けての意見交換、勉強会等）している。

が自らのライフスタイルや志向に応じて選択的かつ限定的、部分的な参加が可能である。作業内容や範囲は個人の能力や感性に応じて決まるといえる。実行委員会の下位集団である各種班単位の活動をみても、1人が幾つかの班を掛け持ったり、複数の班を自在に横断したりする場合が多く、総じて個人のポジションは不確定である。また実行委員会の場合で班単位に作業が分担されることはあっても、集団全体から個人に対し特定の所属や作業が一方向的に押し付けられることはまずない。

すなわち、担い手集団には以下の特徴があげられる。系譜上の在日に限定していない点、および多様な参加のあり方を受容している点である。それらと表裏一体の要素として、組織化されているとはいえそれは極めてシンプルであり、柔軟性や融通性のある点が指摘できるだろう。それゆえ「東九条マダン」の担い手集団とは、明確な輪郭をもつものではなく、「外部」「内部」といった判別が極めて難しい、非定型の集団として解釈できる。また集団内部においても、事務局、実行委員、当日スタッフといったポジションに各人がアイデンティファイする場合もあるが、それぞれの立場性の区別は極めて曖昧であるといえる。

### 3-2. 担い手

#### 3-2-1. 現在

では現在の担い手を領域ごとにみていこう。まずリーダー的人物であるが、実行委員長を祭りの発足を呼びかけた在日2世B氏、事務業務の統括や会計、会議の司会進行といった実質的運営（以下、実質的運営）を日本人C氏、日本人D氏、日本人W氏の3人が担う。また第12回以降、在日3世K氏が日程の調整がつき次第、B氏と共に渉外を担当するようになった。なお

B氏、C氏、D氏、そしてK氏は共に「ハンマダン」メンバーでもある。

会議の領域については、事務局および実行委員会の会議への参加動態を参照する（表2）。3回以上事務局会議に参加した者をみると、在日の参加者が4名、日本人が7名の計11名である。在日の参加者の内訳は、近年主力の民族団体であるT団体とG団体<sup>(32)</sup>、「ハンマダン」の代表者ないし参加者で、うち「ハンマダン」メンバーが2名である。日本人の参加者の内訳は、「個人参加」が6名、「ハンマダン」メンバー1名である。ちなみに、第11回（2004年度）、3回以上事務局会議に参加した者は計11名である。内訳は、在日がG団体1名、「ハンマダン」1名の計2名、日本人が「個人参加」7名と「ハンマダン」2名の計9名であった。すなわち会議の領域は、「個人参加」の日本人が不可欠である点、および在日については「ハンマダン」に所属する者が複数参加している点が指摘できる。

一方パフォーマンスの領域（図2）はどうか。特に祭りの視聴覚的シンボルである民族楽器演奏の担い手をみると、「和太鼓&サマルノリ」のサマルノリ側、および「パレード」や「ブンムル」等に出演する「ブンムル隊」を統括する「ブンムル班」は、共に「ハンマダン」メンバーが中心である。また「マダン劇」は実行委員会等で広範に参加が呼びかけられるが、主要キャストを含め「ハンマダン」から複数参加する場合がしばしばある。その他、上演に不可欠なのは、民族楽器を用いて芝居に合の手を入れる「チェビ」の存在だが、これもほぼ毎回主に「ハンマダン」の一部が担う。他方、祭り当日の会場装飾を担う「美術班」はリーダー的人物を含め「個人参加」の日本人が中心である。その中の数人は事務局等の会議にも頻繁に参加

(32)在日の学生で構成される民族団体で、「東九条マダン」に参加する京都本部には主に市内の大学に通う学

生が所属する。

表2 事務局および実行委員会の会議への参加動向（第12回、2004年度）

[illegible]

04/7/4実行委結成式

計36名参加(これまでに事務局・実行委員会議へ参加あり(うち「ハンマダン」3名)=17名、T団体=2名、G団体=3名、M青年会=1名、初参加=4名、他地域の子ども達調査者不参加)

調査者不参加

04/8/27実行委

04/9/18実行委

04/10/11プレイベ交流:

04/10/16 審行委

04/10/10 关门 04/10/30 塞行

ワールドノートに基づき筆者作成。

※参加契機について。「個」は「個人参加」、「団」は「団体参加」。

なお団体の内訳は、

「ハ団」=在日の文化運動団体「ハンマダン」

「T団」＝東九条に事務所を構える、在日青年の民族団体。

「G」＝主に市内の大学に通う在日学生、在日青年の民族団体。

「S団」=小外研（小學校外国人教育研究協議会）・中外研関係者。

「K団」=京都にある沖繩の民俗芸能を行う団体。

「B団」＝雑誌販売を中心にホームレスの生活支援

「M団」＝民団系の青年団体。

「C寸」＝縦連系の小学校の関係者。

基本的に事務局会議は火曜日夜、実行

「主要参加団体」の代

つれといいたが、「王女参加団体」の代

吉成式およびイベント交通令の参

計算できた人数である。

昇進に人奴である。

→3回以上事務局会議に参加した者＝計11名  
(第12回)

在日=4(团体4—T团体1、G团体1、

「ハンマダン」2

(個人)

日本人=7(団体1-「ハンマダン」)

(個人6)

→3回以上事務局会議に参加した者＝計11名  
(第11回)

在日=2(团体2—G团体1)

「ハンマダン」1

$$\left( \frac{O}{\square} \right)$$

日本人=9(団体2-「ハンマダン」)

(個人7)

※2004年度、基本的に事務局会議は火曜日夜、実行委会議は土曜日夜に行われた。(事務局会議は昨年度まで土曜夜に行われていたが、「主要参加団体」の代表者の都合を考慮し、2004年3月以降は、火曜日に行われるようになった。)

※実行委員会結成式およびイベント交流会の参加者の内訳については、自己紹介を行った者に限定した。総数は筆者が換算できた人数である。

表3 祭り当日要員一覧（第12回、2004年度）

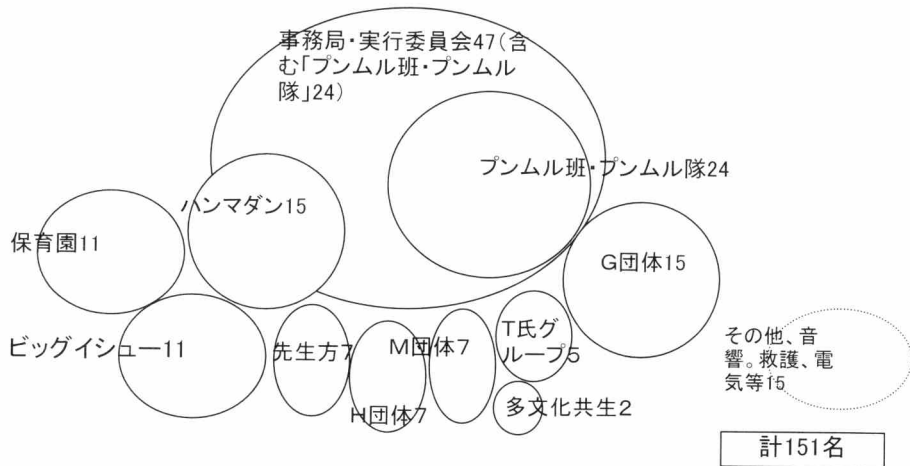
ピックイシュー	先生方	M団体	T団体	G団体	事務局・実行委員会	多文化共生	保育園	PT氏グループ	ブンムル隊	その他		
BM○	日?M	在M地○	在F	在M○	在M	日F	日F	日M	日M	手話通訳A		
日M	日M	在M	在F	在MO	在M▽○	在F	日F	日M	日F	B		
日M	日M	在M	在F	在M	在M▽○		日F	日M	日F	C		
日F	日F	在M	在MO	在M	日M○		日F	日M	日F	D		
日?	日F	在M	在M地○	在M	日F地		日F	日M	日F	音響		
日F	日M	在F	在M	在M	在F地		日F	日M	日F	A		
日FO	日M	在F	在M	在M	在M地○		日F	日F	日F	在M地		
日F				在M	日M▽		日F	日F	在F地○	VTR		
				在M	在M▽○		日F	日F	日F▽	(+日M)		
日M				在M	日M○		日F	日F	日F	電気		
日M				在F	日FO		日F	日F	日F	日M		
日M				在F	在F地▽○		日F	日F	日F	日M		
				在F	在MO				在M地▽	会社		
				在F	日F				日F	伴奏		
				在F	日FO				日F	業者警備A		
					日M				在F	B		
									日F			
									在M			
									在F			
									向島の先生			
11	7	7	6	15	3	6	2	11	5	12	21	15

※2004年10月30日実行委員会時配布レジュメ（「第12回東九条マダン要員一覧（人の重複にないよう）に記録した動員表、弁当数の算出基礎表）」に基づき筆者作成。分類軸についてはレジュメのまま。  
 ※2004年度（第12回）、事務局会議に3回以上参加した者には◎。事務局が実行委に1回でも参加した者には○、在日の文化運動団体「ハンマダン」メンバーには▽を追加。  
 ※「ピクイシュー」＝雑誌販売を中心にホームレスの生活支援をするNPO。今回初めて参加。  
 「先生方」＝小外研（小学校外国人教育研究協議会）・中外研関係者。  
 「M団体」＝民団系の青年団体。  
 「T団体」＝東九条に事務所を構える、在日青年の民族団体。  
 「G団体」＝主に京都市内の大学に通っている点について。一番左の欄は在日のリーダー的人物。左から2番目の欄は、事務局・実行委員会会議に頻繁に参加する者。左から3番目の欄は、事務局・実行委員会会議に頻繁に参加する者。一番右の欄は、近年、会議には参加していないが毎年当日スタッフとしては参加している者で、主に東九条地域在住の者。

「多文化共生センター」＝京都市内にあるNPO。今回初めて、当日のみ参加。  
 「K氏グループ」＝在日3世K氏の友人たち。表以外にも、2名が前日準備にのみ参加。  
 「ブンムル隊」＝「東九条マダン・ブンムル班」がまつり当日に向けて結成する楽隊。表の右の欄は、主に指導を担う者。  
 「保育園」＝東九条地域にあるカトリック系の保育園。

外部参加人数	スタッフ総数	151
こどもブンムルチャング(含ソゴ)	42	
朝鮮初級学校6年(教員1名○)	19	
向上社児童館	16	
等々力政彦(トウバ民族音楽)	1	
怒涛(和太鼓G)	7	
琉球ジェネレーション	8	
ドウルナスム(仮面劇)	20	
コリアンカトリックセンター	10	
	123	
総数	274	

図3 祭り当日要員一覧（第12回、2004年度）



※2004年10月30日実行委員会時配布レジュメに（「第12回東九条マダン要員一覧（人の重複のないように記録した動員表、弁当数の基礎算出表）」）に基づき筆者作成。

※「事務局・実行委員会」および「ブンムル班・ブンムル隊」は「ハンマダン」メンバーを含まない数。すなわち「個人参加」の数。ただ「事務局・実行委員会」の参加者に「ハンマダン」の一部が含まれるため、図の作成にあたっては部分的に重ねた。

※「ビッグイシュー」＝雑誌販売を中心にホームレスの生活支援をする NPO。今回始めて参加。

「先生方」＝小外研（小学校外国人教育研究協議会）・中外研関係者。

「M団体」＝民団系の青年団体。

「T団体」＝東九条に事務所を構える、在日青年の民族団体。

「G団体」＝主に京都市内の大学に通う在日学生民族団体。

「多文化共生センター」＝京都市内の NPO。今回始めて、当日のみ参加。

「K氏グループ」＝在日 3 世 K 氏の友人達。表以外にも、2 名が前日準備にのみ参加。

「保育園」＝東九条のカトリック系の保育園。

している。

当日スタッフについては、実行委員会の会議の際に配布された当日要員一覧を基に作成した（表3 および図3）を参照する。弁当数算出をかねた表3は、分類軸に「団体」と祭り組織内の立場との混同がみられるが、これは重複記載を避けるため事務的な割り切りの上に作成されたことにもよる。ここで確認すべきことは、まず開催当日には「団体参加」が不可欠な点である。そして幾つかの参加団体の中でも「ハンマダン」のみ、1 参加団体として表記されず、所属メンバーは「事務局・実行委員」と「ブンムル班」に分けて記入されている点である。これはレジュメ作成者のD氏自身「ハンマダン」であることにも起因するといえる。しかし、「ハンマダン」は他の団体と異なり、理念上は「団

体参加」に違いないものの、実質的には「個人参加」と同等ないし極めてそれに近いものとして認識されていることが窺える。

このように現在、担い手集団の活動は多様である中にも、それぞれの担い手には一定の傾向がみられる。会議への恒常的な参加者に「個人参加」の日本人、パフォーマンスの領域の中心的な担い手に「ハンマダン」、そして当日開催には「団体参加」が不可欠であることが分かる。そしてリーダー的人物のうち3人が「ハンマダン」であり、その「ハンマダン」は会議とパフォーマンスの双方の領域に参加するメンバーを有する団体である点に留意しておこう。

### 3-2-2. 通時的分析

次に各領域の担い手のこれまでの動向をみていく。まずリーダー的人物である（表4）。第

表4 リーダ的人物の動向

	実行委員長	事務局長	実質的運営
第1回(1993年)	T氏(在日)	B氏(在日)	C氏・W氏(日本人)
2回			
3回			
4回	勇退		W氏
5回	B氏	W氏	
6回			
7回		廃止	
8回			C氏 D氏(日本人)
9回			
10回			
11回			W氏
12回			
13回			

※インフォーマントの情報に基づき筆者作成。

※太字は「ハンマダン」のメンバー。

1回から第3回、実行委員長を地域の保育園園長でもある在日2世T氏、事務局長を祭りの発足を呼びかけた在日2世B氏、実質的運営を日本人C氏と日本人W氏が担っていた。第5回時には、実行委員長にB氏、事務局長にW氏が就任する。以降現在まで、実行委員長はB氏が務めている。一方、事務局長のポストは第7回終了後W氏が祭り集団から離れると同時に廃止された。第3回終了後にC氏が祭り集団から距離を置いて以来、実質的運営はW氏が一手に担う状態が続いていた。そして第8回準備にあたりC氏が再び参加、この回に初めて祭り集団に参加し出した日本人D氏と共に、実質的運営を担う。第10回にはW氏も再び参加、現在はC氏とW氏、D氏が実質的運営を担っている。繰り返しになるが、在日B氏、日本人C氏とD氏は「ハンマダン」でもある。

会議の領域については事務局名簿を参照する(表5)<sup>(33)</sup>。第1回から第3回まで変動はなく、参加者15名中在日が5名、日本人が10名である。在日の内訳は、2つの民族団体の代表者が各1名、「ハンマダン」が3名である。日本人の内訳は、「個人参加」が3名、「団体参加」が7名である。そして第4回、第5回、第6回の準備期に新規者が増えている。その新規者には、エスニック・アイデンティティや居住地には拘わりなく「個人参加」の者が多く、また「ハンマダン」の在日3世数名が含まれている。第10回以降は作成されていないが、現在の会議への参加状況は前述した通りである。

パフォーマンスの領域についてみる。「パレード」、「プンムル」といった民族楽器を用いた演目や、「民族楽器体験コーナー」における楽器の指導や楽器の貸し出し、および「和太鼓&サ

(33)事務局名簿を扱うのは、組織全体の正式な名簿がないなか、発足時から筆者が祭り集団に参加する1999年までの名簿を唯一入手できたことによる。実行委員会会議を含めると事務局会議のみでは信憑性を欠くが、事務連絡がパソコンのメールで一斉送信される現在と

は異なり、かつては双方向的なやりとりを必須とする電話連絡が主であった点を考慮すれば、事務の領域の中心的担い手の抽出に、事務局名簿は十分に役立つといえる。

「ムルノリ」のサムルノリ側は、第1回から現在まで継続して「ハンマダン」が中心的に担っている。そして発足以来の恒例演目の1つ「マダン劇」の各回の主な台本執筆者は、第1回、第2回、第8回、第10回、第11回が在日2世A氏、第4回と第12回が在日3世I氏、第5回、第6回、第7回が日本人W氏、第9回が日本人E氏である。前者2人は「ハンマダン」である。上演の際の「チェビ」もほぼ毎回「ハンマダン」メンバーの一部が担う。また「美術班」は発足時から現在までエスニック・アイデンティティに拘らず「個人参加」の者、および地域の子供達が多く参加してきた。そのリーダー役には、第1回から第4回は（当時）保育園保護者で地域在住のM氏、第5回以降現在はY氏があげられる。近年はH氏が加わり、Y氏と役割分担がされつつある。この3人は日本人である。

当日スタッフとしては、発足当初から現在まで「団体参加」が不可欠である。ここでは主な参加団体の動向を確認しておく。祭りは幾つかの団体単位の参加を基に発足した。それらの団体は年に1度祭り開催に向けて結集するが、普段は各々の目的に則して個別に運動しており、必然的に祭りへの参加のスタイルは変動する。その中で、これまでの分析でも示唆されるように「ハンマダン」が唯一「準備段階も含めて現在までずっと全面的に関わって」〔B氏〕きている<sup>(34)</sup>。T団体の場合、第1回「東九条マダン」の翌年にT団体独自で祭り形式のイベントを開始、その翌年には実行委員会立ち上げ以前から中心的に参加したリーダーR氏が地域を離れる。

(34) 「ハンマダン」メンバーの1人はこう語る。

「個人参加やから、ハンマダンとしては、全員個人で参加しよう、って。とりあえず祭りを成功させなアカンから全力投球や、ということで…中略…（第1回時は）ハンマダンの祭りか、とも言われましたもん。嫌味でね。結局、ハンマダンが、僕らが全員で支えていかなアカン、って全力投球してたから、そういうふうに見えたんでしょうね、たぶん。」[K氏]

表5 事務局の参加者の動向

[illegible]

※フィールドノートに基づき筆者作成。

※「居住地」には、東九条3学区内の者は「地」と記した。



そして後任者が率いるT団体は「運動理念の相違」を主たる理由に当初のような参加は控えるようになった。他方、M団体は第1回開催後しばらくして解散、だがそのリーダーS氏は、その後数年にわたり会議の領域の中核の一人として参加した。発足時には演目でも参加した識字学校は、当初中心となったスタッフの移動や在日1世の減少で教室の運営自体が停滞気味となり、第3回以降は出店のみでの参加となった。一方、発足時はさほど目立つ参加はしなかったG団体が、特に第5回以降は積極的に参加し始め、近年は毎回「ブンムル隊」の一定数を占める。そして第8回時、当初のような全面的な参加ではなく当日スタッフという局所的な形では参加し続けたT団体が、南北共同声明といった情勢変化やリーダーの交替を背景に、再び準備段階から頻繁に参加し出す。なお保育園は、発足時には実行委員会の本拠地になるなど、中心的な役割を担ったが、事務局が独自に設けた事務所に拠点が移ってからは、会議への参加はほとんどない。とはいえ、祭り当日に関しては発足以来現在まで継続して演目の一部および「民族衣装試着コーナー」を担っている。

以上のように、通時的にみた場合も、リーダー的人物数人を輩出し、パフォーマンスの領域でも特に民族楽器演奏を継続して担う「ハンマダン」が、担い手集団への参加密度が最も濃い団体として指摘できる。

## 4. 「民族民衆文化牌 ハンマダン」

### 4-1. 「ハンマダン」概要

では「ハンマダン」とは一体どのような団体なのであるのか？「ハンマダン」は正式名を「民族民衆文化牌 ハンマダン」という。韓国で1980年に上演された政府の農業畜産政策の病弊に苦しむ農民の姿を描いたマダン劇（「豚プリ」）の京都での公演を目的に1986年に結成された実行委員会が、恒常的な活動として定着したものである。この実行委員会は、市内の大学の朝鮮語自主講座や韓国の民主化運動支援といった韓国に視点を置いた運動の参加者、および識字学校や住民運動といった在日の状況に依拠した地域レベルの運動に携わる若者達などによって構成されたものである<sup>(35)</sup>。

発足当初から現在までほぼ20年にわたり、週1回の例会や民族楽器の教室「ソリマダン」の開講等、日常的な活動を継続してきた。その他の主な取り組みとして、当初は韓国のマダン劇やオリジナル台本による創作マダン劇の上演、近年は「東九条マダン」に関連する活動、および外国人教育・人権教育の脈絡での学校関係者からの依頼による公演・講演がある。現在のメンバー（表6）は17名、うち例会に常時参加する者が10名程度で、エスニック・アイデンティティは在日が13名、日本人が4名である。ここでいう在日には「日本籍朝鮮人」あるいは「ダブル」、「クォーター」<sup>(36)</sup>と自称する者、日本人

(35) この実行委員会の結成を呼びかけた在日2世A氏は、朝鮮半島の民俗や民衆文化の研究家として在日の文化運動全体に影響を与えた人物である。1970年代から日本最大の在日の集住地域の大阪市生野区等でマダン劇運動を主宰していた。

(36) 「ダブル」とは両親それぞれの国籍もしくはエスニック・アイデンティティが異なる者。祖父母のどちらかが朝鮮半島出身者を「クォーター」と呼ぶ場合もある。近年にみる文化本質主義に基づいたアイデンティティ・ポリティクスの中で、「ダブル」達は、マジョリティ

からの同化という文化的圧力とマイノリティからの異化の力の力にひきさかれ、居場所を失ってきた（松田素二「文化／人類学—文化解体を超えて」杉島啓志編『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』世界思想社、125～130ページ）。ところで現在では通婚が80%以上とされている。1985年の国籍法の改正で、父系優先から父母両系に変更され、どちらかが日本籍であれば子供は日本国籍を取得できるようになった。そのため、親の一人が在日で日本国籍を持っている者の数は増加するが、韓国籍・朝鮮籍の子供の数は減っ

表6 「ハンマダン」メンバー一覧

	生まれ年	性別	生まれ／現住地	エスニック・アイデンティティ	参加(開始)年度	備考
A氏	1935	M	外・外	在日	1986	「ハンマダン」発足呼びかけ人。日本人女性と結婚。さんとは血縁関係にある。
B氏	1941	M	地域・外	在日	1986	「東九条マダン」発足呼びかけ人。日本人女性と結婚、日本国籍取得後、「民族名」を名乗る。L氏、N氏とは血縁関係にある。
C氏	1955	M	外・地域	日本人	1986	同和地区出身
D氏	1958	M	外・外	日本人	1986	
(E氏)	?	F	?・地域	在日	1986	現在、日常的な参加はなし。
(F氏)	?	F	?・地域	在日	1986	
(G氏)	?	M	?・外	日本人	?	軽度の障害がある。
H氏	?	F	外・地域	在日	1986	
I氏	1970	F	外・地域	在日	1992	A氏とは血縁関係にある。
J氏	1970	F	地域・地域	在日	1993	
K氏	1972	M	外・外	在日	1992	国籍日本
(L氏)	1970年代前半	M	外・地域	在日	?	国籍日本。B氏、N氏とは血縁関係にある。
M氏	1974	F	地域・地域	在日	1988	
N氏	1975	F	外・外	在日	1987	国籍日本。B氏、L氏とは血縁関係にある。
(O氏)	1970年代後半	M	外・外	在日	2001	
P氏	1985	M	地域・地域	在日	2002	祖父のみ朝鮮半島出身者。E氏とは血縁関係にある。
Q氏	1987	F	地域・地域	日本人	2002	

※インフォーマントの情報に基づき筆者作成。

※「生まれ／現住地」欄には、東九条3学区の場合、「地域」とした。

※( ) はインタビューを行っていない者。

には同和地区出身<sup>(37)</sup>者や軽度の障害を持つ者が含まれる。また近年には地域で生まれ育った日本人が入団している。男女比率は9:8である。在日2世が主宰、近年は在日3世代が中心的担い手であるが、全体の年齢層は20代前半から60代後半まで幅広い。学生以外是有職者で、その意味ではアマチュア集団である。現住地もしくは出生地が地域の者は17名の中12名である。正式な入会基準・規約はないが、「ハンマダン」ホームページ掲載の文章「京都マダン劇実行委員会よびかけ」と「民族民衆文化牌「ハンマダン」の結成にあたって」が運動理念にあたる<sup>(38)</sup>。また例会や各種公演への参加、会費納入が可能

な範囲で義務付けられている。

#### 4-2. メンバーのエスニック・アイデンティティおよび拠点としての「地域」

この「ハンマダン」の特性を照射するため、メンバーのエスニック・アイデンティティ、および拠点として掲げる「地域」に関する歴史的経緯を参照しておこう。発足当初から「ハンマダン」には日本人が参加した。しかし1980年代半ば、マダン劇という「在日の表現」に日本人が参加し、その表現に日本語を用いることは決して一筋縄でいくものではなかった。当初交わされた壮烈な議論を当時のメンバーは次のよう

く、ていくことになる。

(37)日本国籍を取得した在日は、国籍による呪縛を受けなくなるとしても、今度は戸籍によって束縛されかねない。その意味では、同和地区出身者と日本国籍を取得した在日は、同じような境遇におかれているともいえる。(戴エイカ「在日」にとって「民族とは何か?」『大阪市立大学人権問題研究センター編 人権問題研究』、2号、2002年、14ページ)。

(38)また「よびかけ」文書には、「「ハンマダン」とは、ひとつの広場、共同のマダンという意味をもつことば

です。それはつねに開かれたマダンとして在日同胞の生の現場であると同時に、人間の解放を希求するすべての人々との連帯のマダンでもあるべきでしょう」という一節がある。つまり「在日同胞」以外は一足飛びに「すべての人々」として一括している点からも、「ハンマダン」の理念では在日の「ひとつの広場」としての性格が端的に表明されているといえる。(http://www.mars.dti.ne.jp/~saram/index.htm 民族民衆文化牌 ハンマダン 2006年1月15日)。

に語る。

「日本人とやるということは、今でこそそれほど摩擦はないんですけども、(当時)とても苦しいものでした。例えば3世の女性が日本人と並んで練習していた。皆、パチチョゴリ、民族衣装を着ますが、若い一人の女性が突然、あんたこんな着んといて、と無理に脱がせてしまう。あんな、私らが何でもこれを着られるようになったのか。何でもチャングなんか叩いてるのか、分かるのかあって。そんな場面もありました。」[B氏]

「マダン劇やる時に、朝鮮人がケンガリとチャングで、日本人はプクとソゴで、っていうのが何となく暗黙の了解みたい。チャングとケンガリは朝鮮人のものって意識が強かったね。そういう意識や思いが色々ハレーションを起こすのやけれども。日本人にはケンガリに触れて欲しくない、とか、この歌は朝鮮人の歌やから朝鮮人にしか歌ってほしくない、とか。そういう発言がいろいろな思いと相まって飛び出す。それに僕ら反発するっていう……」[C氏]

しかしマダン劇の上演という1つの土俵のうえで互いに「反発し合う」ことは「摩擦」が不可避であると同時に、「ものを作っていく過程の中で共有する部分、共鳴する部分」[C氏]を生み出した。そして1986年11月29日「マダン劇 豚プリ」を市内文化施設のホールで上演、成功裡での終了を機に「ハンマダン」が発足する。

会の理念にあたる上記の「よびかけ」文書をみてみよう。「民族文化を継承」、「在日同胞の文化創造」といった在日の文化運動としての性格をあらわす文言に併せて、そこには日本人の参加に関する記述がある。「呼びかけ人」とし

て名を連ねる15名中5名は日本人である。いわば発足当初の「摩擦」とは、マダン劇という「在日の表現」をめぐる、系譜上の在日と、系譜上は在日ではないが在日の状況やマダン劇という表現に関心を寄せる者達との論争であった。それは「ハンマダン」という「民族文化」を用いた運動団体が、出自と特定の関心のどちらを団体の構成の要件として優先させるかの論争だったといえる。そしてその結果「ハンマダン」は、系譜に基づく在日に必ずしも限定されない、在日を主体とした文化運動団体として出発したのである。

そして「ハンマダン」は「地域」を運動拠点に据える。上記の「よびかけ」文書には、「生活の現場に密着した文化表現活動」との一節がある。これには、1980年代に地域で展開されていた朝鮮の「民族文化」を用いた2、3のグループを統合編成する意味合いも含まれていた。「地域」とは具体的にはいうまでもなく、東九条を指していた。発足当初からの中心メンバー日本人C氏は、「ハンマダンには東九条出身の者も多いし、東九条でっていうのは自然な気持ちであった。京都に関わりが深い在日には九条から、っていう人も多いし」と述べ、さらにこう続ける。

「九条は象徴的な地域だったと思うから。京都の中でも被差別の地域として、朝鮮人も部落民も、貧困家庭とか低所得者層とかもね、色んなもんを包み込むような地域っていう意識があるし。そこで自分達の取り組みをやっていこうというのはあった。」

実際、結成の翌年1987年に、在日や地域住民に向けて語学講座「マルマダン」<sup>(39)</sup>、民族楽器の教室「ソリマダン」を開講する。特に「ソリマダン」には地域の保育園関係者や子供達が通

(39) 一方「マルマダン」は1988年のソウル五輪を契機にした韓国ブーム等の影響もあり、1990年代には在日と日本人の比率が逆転、1998年には8割以上が日本人に

なり1998年には内部関係者のみを残して外部募集が中止された。

い、運動は文字通り「地域」に開かれていく。1987年の夏には地域でも最も在日集住率の高い一帯の夏祭りに参加する。地域の公園では在日1世や子ども達にマダン劇やブンムルを披露した。1990年には、立地条件のよさから悪質不動産屋や土地ブローカーが横行する駅前周辺の現実を風刺した創作マダン劇、「土地ブリ」の地域での上演を企画する<sup>(40)</sup>。そして1992年晩秋の例会で、リーダーの1人から「生野民族文化祭のようなものを京都でやる」という発言が飛び出す。

「土地ブリ以降、何もせえへん時期が続いてたんです…中略…ほんまにあれば忘れもしない重要な会議やったんですけど、B氏がハンマダン、今後どうするかの話で祭り開催の話をしちゃって。自分たちの苦労してきたことをお互いにね、ぶっちゃけるとしたら可笑しいですけども、やっぱり日本人も朝鮮人も出してぶつける、みたいな。」[K氏]

「満場一致」で祭り開催が決定したその後、民族団体をはじめ、地域の諸団体や知人・友人に参加が呼びかけられる。「東九条マダン」の第1回開催に向けて始動したのである。

ところで「ハンマダン」が掲げる「地域」とは、出発点では現実の「場」を指すというよりもむしろ象徴的意味合いが強かったといえる。勿論メンバーには東九条に生まれ育ち、地域の実態なり特性を身体化した者が含まれる。しかしこの場合、地域住民としての生活者の立場から内発的に浮上した、地域の実態に関わる概念というよりは、在日や同和地区出身者、低所得者の集住率が高いという東九条の特性の1つが、運動論的脈絡で「被差別」あるいは「民衆的」

な地域として再解釈され、「民族民衆文化」（強調は筆者）を支柱とする「ハンマダン」の運動理念として援用されるに至ったと解釈できる。

#### 4-3. 「東九条マダン」とのあいだで

以上、「ハンマダン」は「地域」を拠点とする在日の文化運動団体である点、およびそれは系譜上の在日に必ずしも限定されるものではない点が確認された。これらのあり方は「東九条マダン」と共通する。しかし安易に両者を同一視するわけにはいかない。なぜなら「東九条マダン」との関係についてのメンバーの語りを参照すると、「趣旨は一緒だから」[J氏]、「ハンマダン、イコール東九条マダンの様な気持ちをもって関わってきてる」[B氏]との語りの一方で、とりわけメンバーシップについての認識に以下のような差異が見受けられるからである。「なるべくなら在日。国籍はどうでもいい、ダブルでも、4分の1でも。そんな人達も出来てきてるし、地域で育った子も入ってきてる訳やし。別に細かい規約とかないし、誰だれでないといけないとかもない。曖昧なままきてるんだけど、なるべくなら在日を中心とした文化運動っていうのは、きちっとした会。」[B氏]

「朝鮮人の場合は、日本籍であろうと何籍であろうと、血がどうであれ、濃いとか薄いとかそういうなんでなしに。でも日本人の場合は、何でやりたいのか？何を表現しようとしているのか？そういうところも含めて、自分の事を色々ちゃんと喋れなあかんし。でも朝鮮人の場合は問わないね。勿論そういう思いをもって入ってくるんやけれど、無条件に

(40)しかし、この叶当劇の地域での上演は見送られた。

地上げの不安に直面している地域住民の心情を徒らに刺激する内容だとして批判を受け、また長老主義で支えられる地域社会そのものからの反発もあったからである。結局、「土地ブリ」は京都大学の西部講堂と京都府宇治市の在日集住地帯のウトロで上演された。そ

の件を振り返りリーダーは次のように述べる。

「私たちが在日同胞の運動が、必ずしも地域にストレートに受け入れられていない事を痛感しました」(朴実「在日朝鮮人と日本人の解放を目指して」『立命評論』105号、2001年、31ページ)。

受け入れよう、っていうのが大前提ね。」[C氏]

あるいは例会の参加や会費納入といった物理的要件の他、次のような語りがある。

「今はそういう言葉活きてるかどうかかわかんけれど、ハンマダンでは、民衆文化運動っていうね、僕らはそういう思いでやってきたから、それをやはり共有できる人<sup>(41)</sup>でないとっていうのはある。」[C氏]

また入団の際には、受け入れる側「ハンマダン」と入団希望者の双方にとっての「様子見の期間」[K氏]がある。そこで入団動機等を確認し、当人とメンバーおよびメンバー間での「意思確認」<sup>(42)</sup>を経て、正式に入団する。いわば「ハンマダン」には、実質的にはイニシエーションが存在するといえる。

「やる気があったら誰でもええんとちゃうかと。けど（入団の際）一応、意思確認はしてるんですけどね。みんなの前で、どうするんや？ 入ってやるか？ って。あんまりダラダラしとったら、ま、1ヶ月くらいしてから、どうしないする？ みたいな。」[K氏]

「ハンマダン」の場合、一見学者が練習等に参加した流れで、何となしに自他共にメンバーとしての認識が生じるという訳ではない。仮に団体を辞める場合でも、趣旨や方向性の相違を伝えてから、つまり「自分を表現してからいなくなる場合はあ」[C氏]ったとしても、知らぬ間に姿をみせなくなることはないという。去る時も「意思確認」を必要とするのである。

以上から次の点が指摘できる。「地域」を拠

点に掲げる在日の文化運動団体である点、またメンバーを系譜上の在日には限定しない点では、「ハンマダン」と「東九条マダン」とは共通する。しかし「ハンマダン」の場合、日常的な活動への参加が前提とされる他、系譜上の在日により開かれている点、そしてあえていうなら、「民衆文化運動」という運動の趣旨をメンバーが共有しているという点に、祭り集団にはみられない、在日の文化運動団体としての「我々意識」の先鋭化が指摘できる。すなわち祭りの担い手集団とは対称的に、「ハンマダン」は一定の輪郭をもつ集団であると解釈できる。

#### 4-4. 「東九条マダン」への参加

今一度「ハンマダン」の「東九条マダン」への参加について確認しておこう。「ハンマダン」はリーダー的人物数人を輩出し、パフォーマンスの領域においては特に民族楽器演奏の中心的担い手である。約半年弱にわたる祭り実行委員会の活動が、「ハンマダン」としての取り組みに影響を与えない訳がない。メンバーは以下のように述べる。

「7月に実行委員会の発足したら、すぐに（「東九条マダン」関連の）練習が入ってきますやん？ ならハンマダンとしての活動は無くなるんですよ。はっきり言うて、ハンマダンのメンバーも動けない、週に何回も。」[K氏]

「ハンマダン独自の活動に対しては、東九条マダンが、ごつつまマイナスになってるね。それは半年間それに没頭しなきゃいけないから。

(41) ちなみに1998年に外部募集を取りやめた「マルマダン」についての語りにも、理念としての「文化運動」および「地域」の重要性にかかわる内容がある。

「文化運動とか、そういう趣旨を理解してきて欲しかった。で、地域の人たちに来て欲しかったっていうのがあるんやけど、自分の仕事に必要やからとか、韓国の流行歌を知りたい、っていう人も増えてきて。」[D氏]

(42) この「意思確認」は、「ハンマダン」のキー概念と

いえる。例えばK氏のインタビューでの「ハンマダン」に関する語りでは「意思確認」という言葉が頻出した。そのK氏によると「ハンマダン」は毎週の例会の他、「行き詰まりとか、何か目的を見失いかけた時」や「ちょっと誰かが問題提起したら」その都度不定期に会議がもたれ、祭り実行委員会を呼びかける際にもB氏による祭り開催に関する意見提起の後、「1人ずつ意思確認」が行われたという。

そこに（「東九条マダン」関連のこと）に没頭するあまり、自分達の活動が正直疎かになってるというか。マダン劇も作れない状態になってるし、自主公演もうてない。これは東九条マダンやり始めた時と関係があるし…中略…毎年、色んなものの片付いて年明けた時に、芝居やりたい、芝居やりたい、って言うて、今年も出来へん訳やんかぁ、それ何年もやってる。」〔C氏〕

しかし、その一方で、「ハンマダン」と「東九条マダン」の取り組みを同一視、あるいは部分的に重複させようとする志向性もみられる。

「やっぱり、究極、ハンマダンが目指してきたのは、東九条マダンみたいに、色んな人が集まって九条でお祭するっていう。それを目標でやってきたから。」〔J氏〕

「自分が主人公や、っていう意味ではさ、東九条マダンもハンマダンも一緒やと思うのよね。自分が主体的に関わって、解放される空間でありたい、そういう場にしたい、というか。」

〔C氏〕

「自分にとって、東九条マダンとハンマダンが一緒になる部分は、色んな人がいて、皆が、分からへんけども分かるうよ、って。…中略…色んな人がいて排除するわけじゃないやん。喧嘩しながらでも、皆が東九条マダンに何で寄ってくるのか？ やっぱり、共生っていうか…。(「東九条マダン」の)趣旨にあるやん？ あれを本当に作っていきたいっていうとこやと思う。」〔N氏〕

実際のところ、祭りの知名度が高まった近年、祭りに関連する「ハンマダン」の動きは、実行委員会が存在する7月から12月の時期に限定されない。前述したように祭り集団への参加はあくまでも任意であり、実行委員会が解散するとほとんどの参加者は雲散霧消する。外部から「東九条マダン」に対し参加・協力の依頼があったとしても、祭り集団としては充分に対応できない場

合も多い。その結果、祭り集団に対するイベント等への参加・協力の要請の多くを、実質的には「ハンマダン」のメンバーが請け負わざるをえない実情がある。なぜなら、外部からの参加・協力依頼のほとんどが民族楽器演奏を求めるものだからである。「ハンマダン」がその中核を担う民族楽器演奏は、在日の祭りを視覚的にも聴覚的にも端的に象徴する。また、接する者の生理に直接的にうったえ日常的意識を変容させる効果をもつゆえに、祭りという集団的行為には不可欠な道具である。と同時に、外部の目からみても最重要なパフォーマンスなのである。

以上のように、祭り集団とは対称的に明確な輪郭をもつ集団「ハンマダン」は、参加密度が濃い団体であり、祭り集団の中核的存在として解釈できる。そしてそのような団体「ハンマダン」が存在するという意味において、「東九条マダン」の担い手集団は重層性をなすといえるのである。

## 5. 2つのマダン

「東九条マダン」の担い手集団の内部には、明確に別団体ではあるものの、祭り集団と趣旨の大枠を共有する「ハンマダン」が存在する。「ハンマダン」は、祭り集団とリーダーを含む参加者が重複し、民族楽器演奏を継続的に担う。また、祭りに対する外部からの参加協力依頼に対応可能な団体でもある。特にパフォーマンスの領域については、「東九条マダン」という祭り行為には不可欠な民族楽器演奏の担い手の、いわば安定した供給源として「ハンマダン」は位置づけられる。「東九条マダン」という開放性を前提にした祭りは、祭り集団とは対称的に限定性や閉鎖性をもつがゆえに明確な輪郭をもつ「ハンマダン」との並存によって成立しているといえる。つまり、本論の前半で述べたような担い手集団にみる融通性や柔軟性を、拡散さ

せずに開放性に導く要素の1つが「ハンマダン」という集団の存在であるといえる。このようなことから、「東九条マダン」の担い手集団とは重層的構造をもつものとして解釈できるだろう。

そして、その「ハンマダン」と「東九条マダン」を比較した場合、共通点としては、系譜上の在日に限定されない点および「地域」を拠点にする点があげられる。一方、相違点は、系譜上の在日を上位概念とする点、「民族民衆文化」という趣旨をメンバーが共有する点、および活動への日常的な参加が前提とされる点である。

## 6. おわりに

今日、在日の祭りの多くがテーマに「多文化共生」や「地域」を掲げ、在日以外の要素を編入した開放的なイベントになりつつある。本論で採り上げた「東九条マダン」も、「民族の祭り」であると同時に「地域の祭り」を目指してきた。また、近年は特に外部から「多文化共生」といった意味付与がされることが多い。

しかし、開放性を前提とした祭りの継続は、それを支える閉鎖性や限定性があってこそ可能であるといえよう。その点を、本論では「東九条マダン」を事例に、担い手の中核的役割を担

う集団を抽出することで解きほぐしてきた。

「東九条マダン」と「ハンマダン」の関係が中心と外延といった同心円的なあり方ではないことにも留意すべきである。勿論、2つのマダンにみられる趣旨の共通性やメンバーの重複には、理念上の連続性がみられ、「ハンマダン」の延長として「東九条マダン」を把握することができないことはない。ただ祭り集団の活動は多岐にわたり、「ハンマダン」のほとんど関与しない領域も、イベントとしての祭りを成立させる上で不可欠なものとして、確かにある。その点、祭りの中心的担い手を論じるならば、本論では十分に考察できなかったが、祭りという「場」の設定を担う人々、例えば事務局や「美術班」に参加する日本人等についても着目すべきである。その上で、「東九条マダン」の担い手集団は宗教性や伝統性に基づく祭り集団の認識のあり方にありがちな同心円的組織とはいかに異なる組織的構造をもつのか、それはエスニシティを契機とする祭り独自のものなのか、他の新しい祭りにも適用できるものなのかといった点について、さらに考察を深める必要があるだろう。祭りの開放的側面や、参加者のライフストーリーのより詳細な考察等と併せ、今後の研究課題としたい。